

公益財団法人
横浜市男女共同参画推進協会
設立30周年記念誌

未来へのタネをまく

1987



はじめに

協会設立から30年。元は沼地だったという土地にフォーラムが建設され、積み重なった土壌には、たくさんのタネがまかれ、果実がたわわに実ってきました。ここで集い、人に出会い、自分に出会い、力をつけ、壁をのりこえ、歩いていかれた方々に敬意を表します。礎を築いてくださった諸先輩、支えてくださったすべての方に感謝します。

だれもが性別によらず生きる権利を尊重される社会になるように。豊かで活力のある、安心して暮らせる社会になるように。これからも私たちは歩み続けます。

contents

ご挨拶	03
刊行によせて	04
フォトライブラリー	05
座談会	06
スタッフが語る過去・現在・未来	
30年の歩み 歴史から未来へ	
1.しごと	10
2.くらしの自立、こころの自立	12
3.こころとからだ性と健康	14
4.女性への暴力	16
若手職員と語る 歴史から未来へ	18
協会の主な刊行物	19
年表	20
公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会の30年	
30人からのメッセージ	24



協会設立30周年によせて

横浜市長

林 文子

（公財）横浜市男女共同参画推進協会が30周年を迎えられましたこと、誠に
おめでとうございます。長きにわたり、男女共同参画社会の実現のため取り組ん
でこられましたこと、心より敬意を表します。

設立当時は、女子差別撤廃条約の批准や男女雇用機会均等法の施行、市
制100周年を記念した横浜女性フォーラム（現・男女共同参画センター横浜）の
開館など、女性活躍の機運が大いに高まっていた時代であり、現協会の前身で
ある（財）横浜市女性協会は大きな期待とともに設立されました。

当時最先端であったフランスの再就職支援講座の導入、女性の視点を生かし
た防災対策、若年女性無業者の自立支援など、先駆的な取組の数々は全国を
けん引しています。現場目線から生まれた解決策を粘り強く実践することで、多く
の女性を後押しし、活躍の道を切り拓いてこられました。

そして今、人口減少社会の到来が間近に迫る中、性別を問わず個々の強みを
生かし活躍できる、多様性あふれる社会の実現に対する要請が高まっています。
私も、横浜市初の女性市長として、日本一女性が働きやすい、働きがいのある都
市の実現に向け、働く女性のネットワーキングや就業・起業の支援、キャリア形成
の支援など、様々な取組に力を注いでいます。

今後も、これまで培ってこられた豊富な知見とネットワークを生かし、新たな課題
に挑戦し続けてくださることを期待しています。ともに、真の男女共同参画社会の
実現を目指してまいりましょう。

むすびに、協会のますますの御発展を心より祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。



誰もが自立できる社会をめざして

公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会
理事長

川名 薫

（公財）横浜市男女共同参画推進協会は設立30周年を迎えました。これまで
長年にわたりご支援をいただいた皆さまに心より感謝申し上げます。

1987年、戸塚に建設中だった「横浜女性フォーラム」（当時）を運営する法人
として、当協会の前身である財団法人横浜市女性協会が発足しました。横浜市
により設立された経緯を共有、引継ぎ、人が尊厳を保って生きていくためには三
つの自立「経済的自立」「精神的自立」「生活者としての自立」が必要という視座
で事業を展開してまいりました。専業主婦世帯が標準とされた時代に主婦の再
就職支援講座の実施や、王子様を待つだけでない知恵と勇気を備えた姫の童話
『アリーテ姫の冒険』の出版は、協会の姿勢を特色づけております。

1999年の男女共同参画社会基本法の制定は、一般的には静かに受け止めら
れましたが、性差別の解消を目指すことが国の基本方針として定められたことは
私たちにとっては道しるべを得た思いで大いなる喜びを持って受け止めました。

21世紀に入り社会は大きく変化し、各分野で女性の活躍が進んでいます。一
方、依然としてDVや性被害が後を絶たないこと、そして雇用の流動化による非
正規労働問題も、いまだ我が国に根強い性別役割分担意識ゆえに、女性により
深刻な影響を与えていることなど、多くの課題が残されています。

30周年の節目に協会の使命を今一度かみしめ、性別にかかわらず、個性や能
力を発揮できる、同時に自立した個人としての生き方が尊重される男女共同参画
社会の実現を、より多様な活動を行い発信することで目指してまいります。

刊行によせて

協会設立30周年にあたり、これまで私たちの歩みを支え、応援してくださった皆さまに感謝の気持ちをこめて、協会設立記念誌をお届けします。

この冊子は、協会の30年の歩みを記録するアーカイブの役割を担うものです。作業を通じて過去を振り返り、これまでの積み重ねを財産としてとらえ直すこと、そしてこれからの担い手である若い世代にバトンを手渡し、若い世代とともに未来を展望することを意図して編集しました。

長年、協会とともに歩んできた職員による座談会では、「横浜女性フォーラム」が開館する前後の様子や、男女共同参画推進の追い風となった北京会議の熱気が伝わるエピソード、一人ひとりの思いを聞きました。

「30年の歩み 歴史から未来へ」では、男女共同参画をすすめる事業の重要な柱であり、協会の歩みの中でも力を入れてきた四つの大きなテーマ、「しごと」「くらしの自立、こころの自立」「こころとからだの健康」「女性への暴力」をとりあげ、テーマごとに協会が大切にしてきたこと、時代の変化の中で取り組んできた事業を振り返りました。

加えて、30年ほど前、協会が設立された頃に生まれた20代後半から30代の職員とともに、今日までの協会の歩みを確かめながら未来に続く道をイメージするための、3回のセッションを行いました。ページには、その中から見つけた未来への小さなタネがまかれています。

年表では、協会設立前、センターの基本構想策定に先がけ、横浜市が7年をかけ入念に行った調査、分析が、現在の横浜市の男女共同参画施策と協会の存在の根源であることから、その業績に敬意をこめ「前史」として収載しました。

最後に、30年の歩みの中、さまざまな場面でご尽力くださった30人の皆さまからいただいたメッセージを掲載しました。この場を借りて深く感謝申し上げます。

これからも男女共同参画をすすめていくために、この冊子が小さな道しるべとなればと願っています。

公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会



協会設立当時の職員の
チームづくり研修（1988年）

1987
→
2017



未来を考える職員のセッション（2017年）



1. 横浜女性フォーラム開館(1988) 2. 開館記念イベント 3. 誰にでもできる現代アート(1989) 4. 自動車整備に挑戦(1991) 5. からだフォーラム(1991) 6. フォーラムよこはま開館(1993) 7. 水曜サロン 荻野アンナ講演(1993) 8. 北京会議・市民派遣団(1995) 9. フォーラムよこはま情報ライブラリ 10. 北・パパのベビーマッサージ(2007) 11. 南・横浜の女性ライブトーク(2008) 12. 北・女性のための再就職転職応援フェスタ(2010) 13. 南・おしゃべりハンドメイドの会(2016) 14. 北・女性のリーダーシッププログラム(2017) 15. 絵本ビクニック(2017)

スタッフが語る 過去・現在・未来

横浜市男女共同参画推進協会が誕生して30年。協会の歴史とともに歩んできたスタッフたちが、これまでの30年間と、未来への思いを本音で語り合いました。

※プロフィールは50音順



2017年8月29日

協会職員としてのスタート

岩船 1987年に横浜市民局の婦人行政推進室の嘱託職員として入り、横浜市女性協会ができてから協会職員となりました。まだインターネットのない時代に、当時最新のビデオテックスという画像システムを導入し、女性のための情報システム「フォーラメディア」のコンテンツづくりを担当しました。

菊池 私は1988年に入職し、開設準備から関わりました。調査研究、事業企画を担当して、「しごと」「じりつ」「からだ」のテーマで、「自己開発プログラム」を制作しました。これはビデオとワークシートをセットにした教材で、何十本ものビデオのシナリオを書いたり、女性の映像制作者やライターとの打合せを重ねていました。

常光 私も横浜女性フォーラム開館前の1988年入職です。前職が広告代理店で営業をしていたので、広報担当になりました。当時は公共施設で広報担当を置くという例はなかったそうです。しかし、絶対に必

要なセクションということで、発足時から理念や事業を発信することを重視していたことがわかります。入ってすぐに『フォーラム通信』などの刊行物をつくりました。婦人問題から女性問題へと意識が変わっていく時期でしたが、とても印象に残っているのが、有馬真喜子さん（初代館長）から言われた「さまざまな人権問題があるが、女性問題は人類の2分の1に関わる世界最大の人権問題である。そういう気持ちで勤めてほしい」という言葉でした。

納米 思い出深いのは採用面接で、なぜか英語のインタビューがあったこと、「1週間くらい宿泊付きで出張と言われたらどうする？」という質問でした。北京会議（第4回世界女性会議）への出張なども想定されていたのかもしれないと思います。そんなことで、1991年に入職してからはしばらく、国際関係の事業に関わっていました。

山崎 私は1993年に入職する前、イベントに何回か来館して、すごくおもしろいところだなと思って。入職した時、子どもは1歳9ヶ月。当時も保育園に入る

のは難しく、保育園が決まったのは、初出勤日の2週間前。いきなり、仕事と育児を両立させることになって、毎日いっぱいいっぱい、実は仕事のことはあまりよく覚えていないんです（笑）。

どこにもお手本がない、誰も見たことのない施設

岩船 開館当時は、女性が情報の主体になる、“女性情報”という概念自体がすごく新しかったと思います。再就職準備講座ルトラヴァイエの中でも、情報担当として女性と情報についてのガイダンスをしていました。どこにもお手本がない、誰も見たことがない施設を新たにつくるために、横浜市が7年もかけ、事前調査からやってきた仕事に対し、私は敬意を感じています。当時、婦人行政推進室の人たちが女性問題について深く勉強されて、センターの立ち上げにすごく情熱を持っていたのが印象に残っています。

常光 センター建設時の現場監督が女性でした。20代で、身長が150cmぐらいで、私も同い歳、同じ背丈



岩船 弘美 いわふね ひろみ

横浜女性フォーラムの画像情報データベース立ち上げを皮切りに、フォーラムよこはま、男女共同参画センター横浜北と、3回の開設準備を経験。生活工房担当時代、ワークショップの手法を使った男性向け料理講座や子育て中の女性向け講座を担当。現在、男女共同参画センター横浜館長、兼協会事業本部担当部長。協会理事。

だったんです。工事中の館内をまわりながら、小柄な女性でも届くようにトイレ個室のフックの位置を調節したり、サンタリーボックスを選びました。階段の段差が少し低めになっていたり、当時の建築物としては画期的に女性目線での使い勝手が反映されていました。

菊池 フランスの「ルトラヴァイエ協会」の女性の再就職プログラムのパテントを横浜市が買い、職員がトレーニングを積んでファシリテーターを務め、講座を展開するというのも、画期的なことだったと思います。25日間の講座の中で、私も再就職向けに制作したビデオを見てもらうところがかかわっていました。相談員が女性の直面している問題について話すカリキュラムもあって、ひとつの講座をみんなで支えていたんです。全国から視察が来られて、年間130件以上。3日に1回以上の視察対応が大変だったことを思い出します。

山崎 90年代に実施していた市民講師養成講座は、教わりたい女性より「教えたい女性」に注目した画期的な事業でした。この講座をきっかけに、プロの



菊池 朋子 きくち ともこ

横浜女性フォーラム開設準備、自己開発事業の立ち上げ、女子学生のキャリアデザイン、フォーラムよこはまでの継続就業支援事業の立ち上げ、『女性施設ジャーナル』編集を担当。横浜市婦人会館勤務を経て現在、男女共同参画センター横浜相談センター長、兼協会事業本部担当部長。協会理事。

講師になった方が何人もいらっしゃいます。「男性職種に進出」という職域拡大の講座も面白かったですね。大工や庭師など、男女で職域が固定化していることに一石を投じたと思いますし、何より、参加者の女性たちの「私もやりたかったの!」という熱とパワーがすごく強く伝わってきました。

「MMクラブ21」と、北京会議の熱気

菊池 当時、働く女性たちは都内に通勤し、家と職場の往復に日々追われ、地域の中で人間関係をつくる場がないという課題が、事前のヒアリングを通じて見えてきました。それで、せっかくランドマークタワーに2館目のフォーラムよこはまができるのだから、働いている女性の交流組織をつくってはどうかという話になったんです。顧問を作家の荻野アンナさんをお願いして1993年8月に会員募集を始めたら、受付初日に長蛇の列ができて。女性のニーズをとらえていたんだと思いました。そうして、女性が仕事帰りに集える交流組織「MMクラブ21」が誕生しました。会員の企画による、ビジネスミーティング、養老猛司さんからゲストを招いた

月1回の「水曜サロン」などの活動をして、12年続きました。施設の閉館にともない、メンバーの数人がそれまでのつながりを継続しようと、自己資金で野毛にネットワーク拠点のお店「はる美」をつくって今に至ります。

納米 私にとって大きかったのは、草の根のアジアの女性活動家を招いて、日本各地を巡回する形で行ったアジア女性会議の仕事に関わったことや、北京会議への参加です。北京会議NGOフォーラムに市民派遣団15人と一緒に参加しました。選拔されたメンバーとはじっくり時間をかけて準備し、坂東眞理子さんを招いた市民向けの連続セミナーを開催しました。実際の会議では、途上国の女性たちの歌や踊り、スピーチが元気に発信されていて、圧倒されたのを思い出します。彼女たちは生存レベルも厳しい状況に置かれている人たちがいることを訴えていて、とても衝撃を受けました。NGOフォーラムには日本から約5000人の女性が参加して、その後、国内の各地でシェルターをつくったり新しい運動をおこしたりと、女性運動の盛り上がりに寄与しました。その人たちが



常光 明子 つねみつ あきこ

横浜女性フォーラム開館時より広報を担当、『フォーラム通信』を編集・発行。フォーラムよこはまの開設準備・総務、交流ラウンジ運営、市民活動支援事業を担う。男女共同参画センター横浜南勤務時に「女性の視点で考える防災のまちづくり」事業を立ち上げ、センター横浜北事業課長を経て、センター横浜南館長。

ちょうど今、世代交代しつつあって、どのように継承していくかが今後の課題なのかなと思っています。

岩船 北京会議の前後から、ビジネス界だけでなく草の根NGOの間でもインターネットの利用が活発になり、女性のITリテラシーという課題を耳にするようになりました。今は情報アクセスの技術的なハードルは下がったけれど、ネットの仮想空間でフェイクニュースやヘイトスピーチが拡散されているのを見ると、ジェンダー平等のメディアリテラシーが今こそ必要だと感じます。

男女共同参画の土壌を耕す仕事

常光 個人の抱える悩みや課題を、個人の問題で片付けず、社会化する過程と一緒にやっていく。そのための、仲間や学びを得ていくことができるのが男女共同参画センターなんだと思います。

2005年に横浜市婦人会館から男女共同参画センター横浜南に移行したときに、「男女共同参画でまちづくりをしていこう」という打ち出しで、「まちと暮らしの安全網」シリーズをスタートしました。その延長で



納米 恵美子 のうまい えみこ

フォーラムよこはままで国際協力・交流事業立ち上げに関わり、北京会議への市民派遣団に随行。アジア女性会議や、その後のアジア女性会議ネットワークの事務局対応などを担当。フォーラムよこはま事業国際課長、男女共同参画センター横浜事業課長兼館長を経て、協会事業本部長。協会理事。NPO法人全国女性会館協議会代表理事。

「防災」への取組が始まりました。NPOの女性リーダーはじめ、たくさんの協力を得て防災事業に取り組んだことを、当時の横浜市の男女共同参画推進課が受けとめてくださり、横浜市では早い段階から防災計画に災害時の女性への配慮の項目が盛り込まれました。女性ならではの課題に、地域で取り組み、事業化することでメインストリームにつなげていけると感じました。

岩船 男女共同参画センター横浜北は、横浜市民ギャラリーあざみ野との複合施設で、別の財団と一緒に施設を運営するなど、これまでとは違う環境で、短い準備期間の中でなんとか立ち上げることができた、という感じでした。区役所に聞いても自助グループの情報はなく、この地域にはそういう土壌がないのかと驚いたんです。でも開館してみると、年々自助グループの応募が増えて、今では3館の中で最も多いです。文化をつくるところにセンターが一役買ったのかなと思います。開館前、市が地元で開く説明会では「文化施設ができることは歓迎。だが、何で男女共同参画

センターが必要なのか」という意見が出ていました。でもいつもそこに、開館を心待ちにしてくれた人たちがいて、男女共同参画センターが必要だと言い続けてくれたことは、とてもありがたかったです。

根っこの問題をジェンダー平等の視点で見ること

納米 私が高校生の頃にウーマンリブが盛んでした。入職後、アジア女性会議に関わって、ああ、フェミニズムにまた出会い直しているなあって思ったんです。その後、国際会議での宣言や、法律や条例の制定を経て、男女平等を求める動きはオフィシャルイズされていって、制度も確立されてきています。でも、最近思うのは、個別の課題解決をやっていくために、その根本的なところに何が横たわっているのか、というのがやや見えにくくなっている気がしています。根っこの問題をジェンダー視点から考察する力が弱くなってきているのかな、と。

岩船 深澤純子さん（前ヒューマンサービスセンター



山崎 員世 やまさき かずよ

横浜女性フォーラムで生活工房、就業支援、情報事業等を担当。再就職準備講座ルトラヴァイエ、起業創業講座のほか、図書管理システムの3館体制の構築に当たる。神奈川新聞に4年間連載された「女と男のブックナビ」を企画、一冊にまとめる。本部事業企画課長を経て現在、センター横浜北館長。

事務局長)が市民運営協議会の席で、最近のセンターの事業について、わかりやすい例えとして「アプリケーションがたくさん並んでいるけど、OS(オペレーションシステム)が何なのか、見えにくい」と言ってくれたのを思い出します。

菊池 北京会議の様子を、現地に派遣された職員が交代でEメールやファックスで送信し、それをフォーラムよこはまで受け取って貼り出していました。全国の女性センターのスタッフが総理府(当時)に北京会議の様子を問い合わせたら「横浜のセンターに聞け」と言われたそうです。あれから20年あまり、東京オリンピックを目前に、私たちがもう一度視野を広げ、女性の人権に関する国際的な動きを地域に落とし込んでいく役割もあると思います。

次の世代に向けて

納米 今から72年前には女性は参政権もなかった。市川房枝さんたちは戦前から女性参政権獲得のために運動していたし、男女別定年、セクハラ、たく

聞き手



小園 弥生 こぞの やよい

1993年入職。フォーラムよこはま交流ラウンジ、自助グループ支援、就業支援等担当を経て、女性起業UPルーム、ガールズ編しごと準備講座、就労体験「めぐカフェ」の立ち上げに携わる。現在、男女共同参画センター横浜南 管理事業課長。

さんの人が裁判で闘って勝ち取って来た。これまでいろんな女性たちが頑張って努力して来て、その中で自分たちが仕事している。次の世代にもこれを踏まえて展開してほしいなと思います。

菊池 男女共同参画センターは全国に300以上あります。施設があっても、大事なのはハコモノにならないことです。存続させていく組織のあり方、職員育成の方法とか、課題があります。これからも市民の応援団に支えていただけるよう、基礎をがっちりつくっていききたいと思っています。

岩船 職員が市民といっしょに汗をかいたり、泥臭くつきあう経験の中で、職員も組織も育てられ、今の協会がつくられてきた。最近はそういう経験をする機会が少なくなっていて、ちょっと残念に思います。職員が、自分にとってその仕事はおもしろいのか、おもしろくなければどうすればよいのか、自分たちが変えていけるという感覚を持てたらいいなと思います。そういう環境にもっていくのが私たちの役割かなと。

常光 「DV」や「セクハラ」という言葉が出てきたことで、女性の抱えてきた問題が見えやすくなった。言葉の力で共感を広げ社会化できていったと思うんです。事業をやっていくうえで、どういう発信をするのか。その言葉が今の社会の情勢、生活者一人ひとりの実感に添うのか、問いかけながら事業を発信していきたい。男女共同参画センターが市内に3館あるということは、横浜市の実策全体のなかで、女性の活躍への期待が大きいということ。とはいえ、女性だけでは実現できない、市民力全体のエンパワメントにつなげる姿勢を忘れてはいけないと思います。

山崎 センターが、市民にどれだけ認知されているか、どう評価されているかをちゃんと把握しておかなければと思います。職員には、「鳥の目」と「虫の目」の両方で見て、考えてほしい。鳥の目で未来を俯瞰して見ると、少子高齢化とか、センターにとって必ずしも明るいだけの未来ではない。でも、虫の目でいねいに、市民の皆さんの「こういうところが役立った」というところを見て、そこを大事にしてほしいと思っています。



女性の経済的自立と 自己決定を支援

女性にとって働くことが経済的・精神的自立と自己決定のベースであると考え、協会では設立以来一貫して就業支援を事業の基軸としてきました。

事業の多くは事前に当事者ニーズ調査を行い、その結果をもとにプログラムを開発してきました。1988年に再就職支援と起業支援をスタートしてから、「女性としごと 応援デスク」を3館で運営する2017年現在まで、社会環境の変化に合わせてニーズをとらえ、形を変えながら事業を継続しています。

横浜市では、女性の年齢階級別労働力率を表すいわゆる「M字曲線」の谷が全国平均より深いことから、横浜女性フォーラム開館当初、女性の再就職支援を目玉の事業として掲げました。学習の場から一歩すすんで、再就職をゴールに据えた経済的な自立のため

の事業が大きな特徴でした。

「再就職準備講座ルトラヴァイエ」(*1)の基本コンセプトは、「自分を知る」⇒「社会を知る」⇒「自分で決める」でした。手法は参加型で、支え合い、自己肯定感を高め、目標に向かえるよう伴走します。このコンセプトと手法は現在の若年無業女性(ガールズ)支援や非正規職シングル女性支援に至るまで受け継がれています。

また、当初の目玉には「男性職種に進出」シリーズもあり、大工、木工、庭師入門、自動車整備など各コースを開催。大きな反響をよびました(次の「くらし」の項参照)。これらは職種と性別による賃金格差解消を意図する、果敢な試みでもありました。

1993年、ランドマークタワー内に2館目のフォーラムよこはまが開館し、市の中心部にも拠点ができると、女性の継続就業にも注力。「キャリアマネジメント」「リーダーシップ」「アサーティブネス」「育休からの職場復

帰」などの講座を次々に企画・展開します。同時に、働く女性の会員制ネットワーク「MMクラブ21」(*2)をスタートしました。会員の申込開始日には行列ができるほどの人気をよび、異業種で働く女性たちの豊かなコミュニティに成長しました。

1988年に「マイショップ・マイビジネス」から始まった起業支援は、「起業創業講座」「女性のための起業スクール」等を経て現在、女性起業UPルーム(*3)の運営と「女性起業家たまご塾」に続いています。これらを修了して創業した女性たちはモノづくり、場づくり、人材育成、コンサルティングなど多方面で活躍しています。

いっぽう、就職氷河期、リーマンショックなど経済状況の悪化を受けて2000年代には、働くことに困難をかかえる女性への支援にも力を尽くしてきました。シングルマザー、若年無業女性、そして最近では2015年に実施した「非正規職シングル女性の社会的支援に向けたニーズ調査」の結果を踏まえた非正規職女性等

解説



***1:再就職準備講座ルトラヴァイエ**
フランスのルトラヴァイエ協会からパテントを取り、アレンジして1988年から継続してきた(現在休止中)。講座日数を当初の25日間から減らし、パソコン実習を加えるなど形を変えてきた。参加型で対話を重視。職員が代々ファシリテーターとなり、安心・安全な場づくりに努めた。修了者はさまざまな職種で、全国で活躍中。



*2: MMクラブ21

ランドマークタワー13階の「フォーラムよこはま」で開始し、異業種で働く女性150名が会員登録。顧問に荻野アンナさんを迎えた。会員は月に一度の夜、水曜サロンを企画・運営したほか、さまざまな自主活動が開花。会報「えむえむ」も発行。2005年の閉館後も会員らが野毛に週末の店「はる美」を開き、つながりは続く。



*3: 女性起業UPルーム

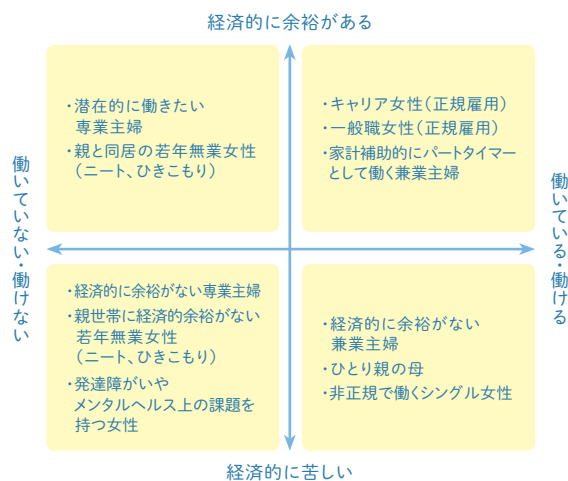
2007年にITを活用した起業支援拠点としてセンター横浜に開設。ナビゲータを配置し、「起業準備相談/HP・ブログ相談」「起業準備セミナー」「女性起業家たまご塾」をメニューの柱に。塾はビジネスプラン完成コースとHP設計コース。食べていける起業をめざし、スキルアップや試行・実践の場も提供、起業家の誕生を後押しする。

への支援に至ります。時代の変化に対応し、支援の対象層を広げ、経済的に困難な層の女性が参加しやすいよう、プログラムを拡充してきています。

これまでに「女性起業家たまご塾」は11期220人、「ガールズ編しごと準備講座」(*4)は17期340人、「再就職準備講座ルトラヴァイエ」修了者は1200人を超えました。これらの支援がどのような効果を上げたのか、結果の測定にも取り組んでいます。2013年に実施した上記3種の就業支援講座の修了者追跡調査によれば、回答者の就労率は押しなべて50～70%という水準です。同時に、世代や働き方の違いをこえて修了者の女性たちが支え合うコミュニティが生まれ、育っていることも明らかになっています。

近年は雇用形態や就労ニーズも多様化する中、女性の再就職・転職等の相談窓口として「女性としごと応援デスク」(*5)をスタートさせました。また、2016年の女性活躍推進法施行を背景に、女性が働き続け、責

任職を担っていけるよう、企業で働く女性リーダーの育成プログラムにも取り組んでいます。



女性の就業支援事業の対象層

2015年、当協合作図。「経済的余裕」「就業の有無」を縦軸と横軸に、女性と就労の状況を可視化した。

若手職員と語る
未来へのタネ

女性が生きることと働くことの間を、若いうちから学べる機会があるといい。“産まなければならぬ”ではなく、子どもを産みたいとなったら自分でえらべるようになるといい

男性の働き方が変わらない中では、仕事と子育ての両立はしんどい、働き続けるのがしんどいという人が多いのではないかと

セクハラが前職では横行していた。職場で女性が性的に搾取されないために、啓発や精神的自立の支援が必要

男女ともに長時間労働で休めない人のケアも必要では

フリーランスやNPOなどのソーシャルセクターを含めた多様な働き方を考えては

M字カーブの底上げ以前に、そもそも雇用が継続されない現状がある。支援の対象や方法をもっと広げていきたい

転勤族の妻の当事者グループが生まれているが、夫の転勤とキャリアの関係について学ぶ場があれば



*4: 若年無業女性(ガールズ)支援

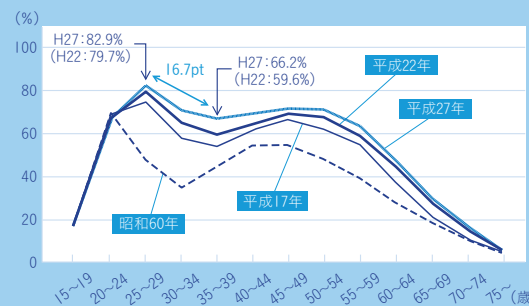
15歳から39歳のシングル女性を対象。2008年のニーズ調査の翌年、「ガールズ編しごと準備講座」(全11回)を開始。2010年に就労体験の場「めぐカフェ」をセンター横浜南に開設。その後、地域のNPO等の受入れ協力で社会参加体験プログラムも広がる。利用者は人の中で安心感を体験し、社会参画への一助となっている。



*5: 女性としごと応援デスク

2015年3月、再就職ニーズの高い地域にあるセンター横浜北に開設。2016年度より3館展開。キャリアコンサルタントによる相談を主に、社会保険労務士による労働サポート相談、職場の人間関係・ハラスメント相談等も行う。利用は無料。幅広い世代、さまざまなニーズに対応している。ミニセミナーは地域への出前も行う。

参 考 | 女性の年齢階級別労働力率の推移



横浜市の経年変化(総務省「国勢調査」より)

2. 暮らしの自立、こころの自立



オープンな場、生活工房での「伝え合い」

生活工房(*1)は暮らしの実験・実習事業の場としてスタートした、ユニークなオープンスペースです。生活者であることをたがいに尊重しよう、暮らしを大切にジェンダー平等の素地をつくろうという発想で、生活工房はそのための実践の場でした。横浜女性フォーラム開館前に策定された横浜市の基本構想では、「女性の経済的自立」と「男性の生活自立」が両輪のように位置づけられていたのです。

手仕事や自己表現を通じて自分と向き合い、自尊感情を育むワークショップや、性別や年齢を問わず生活自立をすすめるさまざまな連続講座を生活工房を中心に開催してきました。「パパといっしょに」「男のくらし入門」などの男性向けシリーズも開館当初からスタートしています。

生活工房では、「教える」「教わる」という関係ではなく、知恵や技術の「伝え合い」(対等性)を大切にしています。同時に、利用者の自主的な活動を支援する視点から、なるべく禁止事項を設けず、利用者の自律性を尊重して職員が利用者日々やりとりをする中で、ともに場を育ててきました。

開館当初に打ち出したのは「男性職種に進出」シリーズ(*2)。大工は男の仕事といった従来のイメージにとらわれず、女性の職域を広げようという、チャレンジ精神にあふれる講座で、マスコミにも注目されました。

「市民講師養成講座」(*3)は、主婦の就業支援であると同時に、生活工房ならではの事業でした。講座修了者が講師を務める手仕事の講習会が日々開催され、その参加者が生活工房の利用者として定着するという好循環を生み出しました。

男性を対象とした生活自立事業では、日常の料理

など生活技術の習得だけでなく、地域でのつながりづくりも視野に、住まいの小修繕ボランティア講座、地域活動入門講座などを実施。地元の飲食店や「おもちゃ病院」など市民活動団体の力を借りた事業に発展し、2000年代には、「おもしろ科学たんけん工房」などシニア男性を中心としたNPOとの協働事業も充実していききました。

2005年に3館体制となってからは、公募型市民協働事業(*4)の拡充によって市民グループの企画による「水彩カフェ」や「世界の料理教室」「横浜野菜のレシピ」など、場の特徴を生かして、体験し、視野を広げる事業を行っています。

アートワークショップとアサーティブネス・トレーニング

生活工房の活用とは別に、身体表現や造形など

解説



*1: 生活工房

キッチンと手芸等の作業コーナーが一体化していることが特徴。個人でもグループでも利用でき、調理を始め、洋裁、染織、木工等、多様な活動に利用されている。手を動かしながら身の上話をする[※]井戸端コミュニティのような場になっている。



*2: 「男性職種に進出」シリーズ

住まいのリフォーム、電動工具活用、大工、木工、庭師、自動車整備などのコースを、生活工房や前庭を使って次々に開催。女性の職域拡大を目指した。1990年には16週連続で「ハンドメイドハウス」の建設に挑戦し、フォーラムの前庭に一坪の家を建てたのが伝説となっている(後に撤去)。修了後、職業訓練校に通い、内装工事請負を始めた人もいた。



*3: 市民講師養成講座

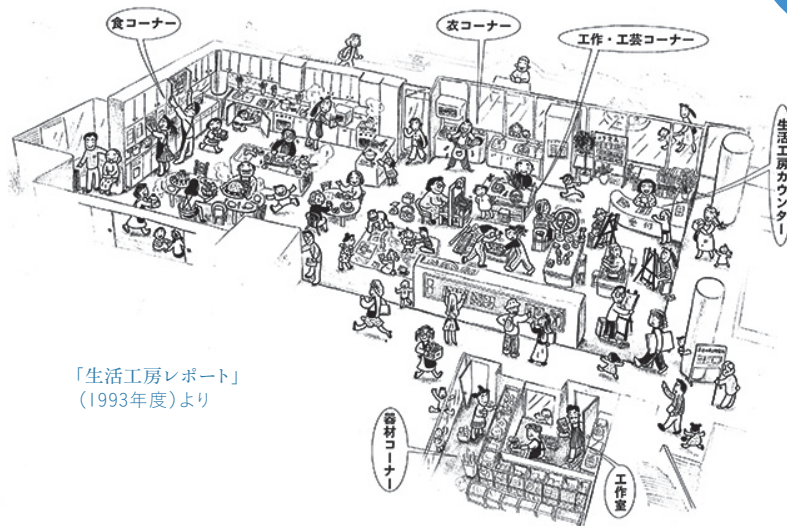
「教わる」より「教えたい」女性のニーズをとらえ、「趣味から仕事へ」を副題に1989年から1995年まで開催。講座を修了した市民講師は一定期間、生活工房で生徒を集めて講習会を開くことができる。さらに次のステップとして、地区センターなどで講座が開けるよう、フォーラムがプロモーションに協力する仕組みで、料理や手仕事の講師人材を多数輩出した。

アートを通じてところを開く表現ワークショップにも早くから取り組みました。相談室が企画した「もうひとつのスペース“Q・気遊”」(*5)は、表現を通じて自分にじっくりと向き合い、心の力を育てるワークショップ。ワークショップという言葉すら聞きなれなかった頃、広報担当は“Q・気遊”を説明するのに本当に苦心したそうです。この流れはその後「女性のための心のアート」と名づけたシリーズやダンスワークショップなどに続いています。

1990年代後半、密室育児の苦しさが問題になりました頃、子育て支援の施策が広がる以前に開催した「子育てママの、わたしの時間」は、アートを介して自己解放や仲間づくりを意図し、後には地域の子育て支援人材を育てる事業へと発展しました。

1995年頃からは、アサーティブネス・トレーニング(*6)の考え方をもとにしたコミュニケーション講座を開始。「NOとっていい」「まわりに合わせなくていい」

「自分を大切にしてい」というメッセージが共感をよび、1998年に発行したフォーラムブック8『ことばに出そう、自分の気持ち』はロングセラーになりました。



「生活工房レポート」
(1993年度)より

世の中はイクメンが当たり前みたいになってくると、そうなれない男性は？ そんな視点も必要かも

シングルの女性・男性が増えていることに対応した事業も必要では？

生活工場のワークキングスペースとしての活用はどうか

参加型アートイベントを増やしていく

これから変わりうる若い世代へのプログラムやメッセージの発信を

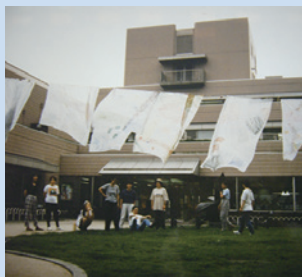
単館映画館とコラボして映像関連のイベントができないか？

誰でも集えるカフェが館ごとにあると良い



*4: 公募型市民協働事業

1989年、「市民研究グループ支援」として開始。年間約6グループに助成した。のちに「市民活動・研究助成」になり、広く助成金と場を提供。『アリーテ姫の冒険』の印税寄付を助成に充てた時代もあった。2005年からは3館で公募。地域出前企画・啓発教材企画等に助成をし、多くのグループと協働している。



*5: もうひとつのスペース“Q・気遊”

相談事業の一環として1990年から1995年まで開催。言葉を介した相談とは異なり、グループでの共同作業やアートな作品づくりを通してゆっくりと自分の感覚や気持ちを確かめていくことにより、自己回復やこころの解放をめざした。フィットネスルームや踊り場、階段から前庭の芝生までを舞台にダイナミックに展開した。



*6: アサーティブネス・トレーニング

イギリス、アメリカに端を発する、積極性や自尊心をもつためのトレーニング。「言うべきことは言い、自分の感情を認めて表現することは人としての権利」(アン・ディクソン。写真:2009年)。「自分も相手も大切にするコミュニケーション」の考え方とスキルを、ロールプレイを通して学ぶ。協会では働く女性向け、暴力の被害を体験した女性向け等を展開し、現在も継続する。



女性が自分のからだを 自分のものにするために

1985年の横浜市調査で「婦人科系の健康」に関して「正しい性知識を知りたい」「悩みを相談したい」というニーズが高かったことをふまえ、開館当初から「リプロダクティブ・ヘルス&ライツ(性と生殖に関する健康とその権利)」の視点から、対等な性のあり方や、女性が自分のからだや健康について主体的に決める権利があることを伝える事業に力を入れてきました。

具体的には横浜女性フォーラムでビデオ教材「からだシリーズ」(*1)の制作や、情報システムフォーラムメディア(*2)での情報提供、「健康サロン」(*3)での専門職スタッフによる、からだや性の相談などを行いました。また、オリジナルの等身大女性の人体模型(*4)の公開制作や、女性のライフサイクルに大きく影響を及ぼす、月経、避妊、妊娠、中絶、出産、セクシュアリティ

などのテーマをとりあげた講座に精力的に取り組みました。また、開館まもなくから子宮筋腫、乳がん、不妊、さまざまな依存症などの当事者による自助グループへの場の提供を始めました。

並行して、フィットネスルームでは、一人ひとりが自分に合ったからだのケアをできるよう、体操やダンスなど多様なプログラムを提供してきました。中でも女性特有の健康課題に着目してスタートした「骨盤底筋体操」(*5)は現在も続いています。

1980年代、アメリカの女性たちによって編まれた『Our Bodies Ourselves』の日本語訳改訂版が刊行され、日本でも女性のからだや健康、セクシュアリティを女性自身の立場で考え、語ろうという運動が起きていました。そうした考え方が先駆的だった時代、女性のからだや性の権利をめぐる女性運動のグループや研究者、医療関係者、教育関係者などの力を借り、新しい情報を得て、職員も理解を深めてい

きました。1995年に発行したリーフレット「女とからだ MYSELF MYBODY」(*6)は女性が自分のからだを知り、大切にするための情報をまとめたものです。

女性であり、患者である立場から医療とのかかわりを考える講座も多数開催してきました。1990年代、「産婦人科とのつきあい方」などの講座を開き、だれでも医療について納得のいく説明を受ける権利があり、自分の望む治療法を自分で決めることができる、という考え方をわかりやすく伝えました。背景には、医療における「説明と同意(インフォームド・コンセント)」が法的に義務付けられる前後の議論の高まりがありました。2000年代には、アメリカで先行していた「性差医療(成人男性を基準に考えられてきた従来の医療に対し、男女の器質的・生理的・社会的な差異を考慮した医療)」の考え方が国内でも広がり、診療科を特定せず、女性のからだ全体、生活環境全体から診る「女性専門外来」が開設され始めます。そのころには医

解説



*1:ビデオ「からだシリーズ」

オリジナルの学習用教材として、制作した50本余の「自己開発プログラム」のうちの「からだ」編。(ほかに「しごと」編、「じりつ」編)。内容は「基礎体温と月経リズム」「母乳」「子宮筋腫」「アルコール」「中絶」など。当時珍しかった女性のビデオ作家とともに、すべてシナリオから制作した。1993年には「私の選ぶ乳がん治療」を市民グループとともに制作。



*2:フォーラムメディア

インターネット以前、独自に構築した情報データベース。地区センター等にも専用端末を設置した。メニューは、(1)あんない、(2)しごと、(3)心とからだ、(4)くらし、(5)なま、(6)学ぶ、(7)掲示板、(8)図書資料、(9)For Foreigners。(3)のコンテンツは、日本家族計画協会はじめ、性と生殖に関する権利に詳しい女性専門家などに依頼して作成。



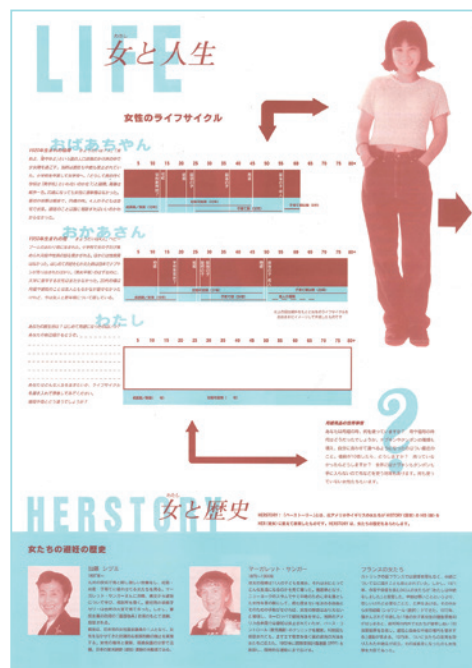
*3:健康サロン

健康サロン事業の柱は、(1)からだに性に関する相談、(2)心とからだの健康とセクシュアリティに関する情報提供、(3)からだにつきあうための技術提供(避妊、基礎体温など)、(4)セミナーや講座の開催、(5)救急対応。助産師、看護師資格をもつ職員が担当した。(1991年度事業報告書より)

療機関と連携し、患者の権利と性差医療の考え方を基本に婦人科系の病気や更年期医療など女性特有の健康課題を取り上げたセミナーを開催しました。

2005年に開館したセンター横浜北では、女性特有の健康課題に対応するフィットネスプログラムとして、がんを経験した女性のためのからだのケアと仲間づくりのための「女性のがん手術後のリハビリ体操」をスタートし、現在は3館で実施しています。術後、からだの変化へのとまどいや再発の不安をかかえ引きこもりがちになる女性も多く、民間の助成金を得て無料で開催しています。

女性特有の病気やさまざまな依存症、暴力被害、ひとり親等、当事者がわちあいをを行う自助グループ支援は、1995年に公募事業として整備しました。以来、市民による支え合いの場として定着。現在では3館で約40グループ、年間のべ約7000人が参加しています。



若手職員と語る
未来へのタネ

フォーラムにはもともと元気な人が来るイメージが強い。エネルギーが低くても、元気ハツラツやパーフェクトな状態じゃないときでも参加できる、したいと思う講座を提供したい

人とかかわりや恋愛を怖いと言う高校生もいる。人とのコミュニケーションで心地よい状態というものを体験してほしい

性についてポジティブに伝える・知る場をつくりたい

“子宮を大切に”とか“産むために”といった言葉には違和感がある。あふれる情報や風潮に流されないで、自分が必要な情報を選べるようにしたい

“正しい”“正しくない”という基準でからだや性の教育が行われるのはどうか。そうならないようにしたい

ほどほどの健康、という概念がよいのでは



*4: 等身大女性の人体模型

リアルな女性の姿をした人体模型。一般には男性の模型しかなかったが、工芸家石橋初子さんに制作を依頼し、ヌードデッサンから始め、型どりして内部に子宮や卵巣を収めた。完成後は健康サロンに常設。利用者からは「力強く誇らしげな模型に触発された」との声も。手順書を見て組み立てながら、その場で自分語りを始めた人もいたという。



*5: 骨盤底筋体操

妊娠、出産などにより女性に多い腹圧性尿失禁を予防、改善するために、骨盤内部にある筋肉を中心に鍛える体操。国内ではいち早く1993年にスタート。尿漏れ予防のセミナーも合わせて開催したが、講座名を言わずに「〇月×日のセミナー」と申し込む女性が多く。当時は今以上に「しも」の悩みは人に話づらいものだった。



*6: 「女とからだ MYSELF MYBODY」

「女と女自身のからだのことをどのくらい知っていますか」で始まるA2判4つ折りのパンフレット。1996年に第2版発行。監修は芦野由利子さん、有限会社ジョジョと協会の共同企画。祖母・母・わたし3代の女性のライフサイクル、世界の中絶と法律、避妊の歴史、ビデオ、ホットラインやグループの情報や図表を満載。

4. 女性への暴力



当事者の 本来持つ力を中心に

1993年の世界人権会議(ウィーン)で「女性に対する暴力は人権侵害である」と宣言の前文に記されたことは、大きなニュースでした。それまで多くの女性が苦しんでいた暴力の問題が、世界共通の課題として顕在化されたからです。その後、1995年の世界女性会議(北京)で「女性に対する暴力」がフォーカスされ、国内ではいわゆる「DV防止法」等の法律の制定や国・自治体の取組へとつながります。

協会では1993年頃からこのテーマに関する調査研究を始めており、そのひとつとして『民間女性シェルター調査報告書』(*1)を刊行しました。さらに、暴力の被害にあった女性への支援態勢をつくることに注力していきました。キャサリン・マッキノンやリンダ・ジンガロはじめ、国内外から支援の専門家をたびたび招き、

私たち自身が学ぶとともに広く知見を伝え、支援のネットワークを広げてきました。

横浜女性フォーラムの開館以来、総合相談の中で、パートナーとの関係に悩む女性たちからの相談にも応えていましたが、1998年からは毎週火曜日に「女性に対する暴力の相談」と名づけた電話相談をスタートしました。また、個別相談と並行して、サポートグループ(グループ型相談)にも力を入れてきました。ドメスティック・バイオレンス(以下DV)被害や性的な傷つきを体験した女性を対象とするサポートグループには、「さらさ」「そよら」(*2)などがあります。フォーラムの相談・情報・講座・サポートグループ等の機能を総合的に提供することで、ジェンダーのとりわれから自由になり、自分を肯定して、新たな道を歩む多くの女性たちを支えてきました。サポートグループの中から自助グループが立ち上がることもありました。

被害者への支援で大切にしてきたのはまず第一に、性暴力、セクシュアル・ハラスメント、DVなどの被害を受けた女性たちに「自分を責めることなく、安全な生活を送る権利がある」というメッセージを伝えること。そのための場のひとつとして2003年に始めた、相談員による「DV情報提供会」は、米国で行われていたドロップインという方法を参考にしたものです。予約制をとらずに、支援者でも教員でも情報を得たい女性ならだれでも匿名で参加できるのが特徴です。

第二に、当事者の本来持っている力を中心に据えること。相談事業に先立つ調査でも当事者の語りを重視し、研究者やNPOと共同で、被害体験をもつ女性との信頼関係をつくりながら個別インタビューなどを通して体験を社会に伝えてきました。その後当事者と相談員が医療機関を訪問し、DVについて話す場をつくったり、体験談をもとにした朗読舞台「ひまわり〜DVをのりこえて」(*3)も制作しました。このような体験

解説



*1:『民間女性シェルター調査報告書』

1995年に日本編・アメリカ編の二分冊で刊行。研究者・支援者の協力を得て、シェルターの現状や被害者支援における課題を明らかにし、社会に向けて提言することを意図した。日本国内の民間シェルター8カ所のヒアリング調査に続き、米国に職員を派遣し、民間女性シェルターとその関係機関へのヒアリングを行い、まとめた。



*2: そよら

性的な傷つきを体験した女性のためのセルフケアグループ。2016年に開発、実施し、報告書をまとめた。暴力とその影響についての情報提供と、参加者同士の分かち合いを行う。職員がファシリテーターとなり、アートや身体感覚を使ったワークを取り入れ、生活の中での安全・回復などについて考える。



*3: 朗読舞台「ひまわり」

DVをのりこえて生きていく3人の女性の実話をもとに協会がシナリオを制作。「無名の尊厳ある女性たちの声を届ける」と銘打ち、演出家芹川藍さんを迎えた舞台づくりワークショップには市民女性40名が参加した(のち、市民劇団オンリーワンに)。2004年から全国出前公演が始まり、10年以上続いている。フォーラムブック16にシナリオを収録。

談が聴く人、悩む人を勇気づけるとともに、語る女性自身も力を得ていきました。

さらに2011年には横浜市DV相談支援センターが開設され、その業務の一部を担うこととなりました。また、近年の大規模災害では、被災後の混乱の中でDVや性暴力が深刻化したり、被害にあった人が声を上げにくいなどの状況が報告されています。そうした中、内閣府の全国女性会館協議会を通じた呼びかけに応じ、2012～13年には東日本大震災後の宮城県へ、2016年には震災のあった熊本県に相談員を派遣しました。

そのほか、10代からシニアまですべての女性を対象とした「女性のための護身術」(*4)を毎年開催しています。デートDVについて若い世代に知ってもらうために、NPOと協働で学校への出前講座を行ってきました。企業や団体の「ハラスメント防止」研修にも、

職員を講師として派遣しています。2013年にはビジュアルなメッセージとして「STOP! デートDV写真展」(*5)を制作し、市内外で巡回展を行いました。最新の企画では、iPhoneアプリ「Charm～女の子の身を守るアプリ」(*6)をデビューさせました。



フォーラムブックシリーズ



*4: 女性のための護身術

「心とからだの力に気づく～女性が女性に伝えるWEN-DO」はカナダで開発された自己防衛のプログラム。声や体を使う訓練とともに他者との境界線の考え方も図解で学ぶ。2003年に「リアライズ YOKOHAMA」との協働事業としてスタート以来、10歳からシニアまでの女性向け、親子向けなどとして現在まで続いている。



*5: 「STOP! デートDV写真展」

写真家小野啓さんによる、高校生をモデルにしたポートレイトを主体にした啓発パネルを(株)電通のコピーライター、アートディレクターの力を借りて制作。商業施設「マークイズみなとみらい」にて写真展を開催し、反響をよんだ後、市内外の公共施設等で巡回展。若い世代にインパクトあるメッセージと視覚的な情報を届けた。



*6: 「Charm～女の子の身を守るアプリ」

Charmは英語で「お守り」の意味。2016年に大学生の意見を入れて開発したiPhone 専用無料アプリ。生きづらさ、性被害、災害など安全が脅かされそうな時に役立つ情報が満載されている。相談機関一覧、防災・ココロとカラダ・人間関係についての読みもの、学生の体験記などのほか、ライトや防犯アラーム等の便利機能も搭載。

若手職員と語る
未来へのタネ

男の子
の性被害の報
告も多いが、男の
子への発信はなさ
れていない

特に
若い世代に向
けて“自分を大切
にしよう”というメッ
セージを発信し
ていこう

マイノリ
ティも民族マイ
ノリティ、性的マイ
ノリティなどと縦割
りに分断されて
いる

“女性は
夜道で気をつけ
よう”などと当たり
前に言われる。“自衛
しろ”ではなく、社会
の問題にしてい
きたい

公的な
支援に乗れる人
は、サバイバー(暴
力を生き延びた人)
の中でもほんのひ
と握りかも

人のく
らしの土台と
なる人権感覚が
まだまだ乏しい
のではないかと

孤立し
ている人、社会
不信から誰にも頼
らず生きている人
の受け皿もなに
が必要

スマホ
を持つ人がほ
とんど。ネットを
使った相談など
で、間口を広げ
ては

若手職員と語る 歴史から未来へ

記念誌制作を担当した30周年記念事業アーカイブ部会では、20代から30代の職員に参加を呼びかけ、事業の四つのテーマに沿って、協会の歩みを伝え、これからの未来について対話するセッションを3回にわたって行いました。中堅職員がファシリテーターとなり、「しごと」「くらしの自立、こころの自立」「こころとからだと性の健康」「女性への暴力」のテーマごとに歴史を振り返ったあと、近未来の2025年に向けて大切にしたい視点やアイデアを出し合いました。各テーマのページ(p.10～17)に配した「未来へのタネ」は、対話の中から出てきたものです。さらにアイデアを整理し、このページにまとめました。未来への手がかりとするために。

協会の過去・現在・未来を語り合いました



2025年に向けて

未来へのタネを 育てるためには

働くこと、生きること を考える

- 生き方を含めて「働くこと」を考える場をつくるには？
- キラキラしなくても普通に働いて、暮らしていける社会をつくるには？
- M字の底上げとともに、より多様な就労支援のあり方とは？
- 子育て支援に偏らない男性向け事業とは？

若い人を巻き込む

- もっと若い世代にメッセージを届けるには？
- 人の中にいるのが心地よいという体験ができる場とは？
- ジャッジしない関係をつくるには？
- 「正しい」「正しくない」を基準にしないで性を伝えるには？

困難な中にいる人に リソースを届ける

- 情報にアクセスしづらい人にリーチするには？
- 公共施設に足を運びにくい人とつながるには？
- 多様なマイノリティが集まれる居場所をつくるには？
- エネルギーが低いときにも参加できる場とは？

ジェンダー平等への 共感を広げる

- ジェンダー平等、人権の感覚を浸透させるためには？
- デザイン力、発信力をもっと高めるためには？
- 協会のミッションを広く知ってもらうためのブランディングとは？
- アートやサブカルチャーの力で共感を広げるには？



現状と課題、未来へのアイデアがびっしり！

【ファシリテーター】 植野ルナ、新堀由美子 【企画】 岩船弘美、小園弥生
【参加者】 石山亜紀子、小林由希絵、金涼子、中岡純子、新見百代、脇さやか (50音順)

協会の主な刊行物

書籍

- 『アリーテ姫の冒険』(監修、1989年、学陽書房)
『新版 女のネットワークキング』(編著、1991年、学陽書房)
『女のグループ活動資金づくりの本』(編、1993年、学陽書房)
『女性起業の完璧マニュアル』(編、1995年、日経事業出版社)
『女性施設ジャーナル』vol.1-8 (編集、1995年～2003年、学陽書房)
※以下各号の特集タイトル
1.まだ必要か、女性センター 2.女性施設の情報機能とは 3.女性施設における市民活動支援とは? 4.女性施設がになう相談事業とは? 5.女性政策の新時代 6.男女共同参画推進・平等にむけた条例はいま 7.女性センターから男女共同参画センターへ 8.男女共同参画時代の女性施設の相談事業とは?
『日英対照 女性学ブックガイド』(監修、1995年、三修社)
『日英対照 女性学ブックガイド〈2〉』(監修、1997年、三修社)
『女性問題キーワード111』(編、1997年、ドメス出版)
『DVにさらされる子どもたち』(R・バンクロフト他著、翻訳企画、2004年、金剛出版)
『シングル女性の貧困』(共編著、2017年、明石書店)

事業報告書

- 『事業報告書』(1988～2016 各年度)
『'88～'89年レポート 横浜女性フォーラム』1990年
『横浜女性フォーラム '90～'91レポート』1991年
『生活工房レポート1993』
『市民研究グループ報告書1989-1993』
『横浜女性フォーラム市民活動・研究助成事業報告書1995-2000』

冊子

- 『フォーラムブック』vol.1-16 1996-2005
※以下各冊子のタイトル
1.ジェンダーを議題にしよう～国連世界会議参加ガイド 2.アメリカの先例に学ぶ～シェルターは社会の資源 3.市民活動応援講座ハンドブック 4.被暴力女性問題解決ワークショップ報告書 5,6,9,11.横浜に生きる女性たちの声の記録(抄録、第一集～第四集) 7.権利実現のための公約 8.ことばに出そう、自分の気持ち～アサーティブネス・トレーニングのすすめ 10.女性に対する暴力対策マニュアルコミュニティキット 12.許すのは私の役目ではない～性的虐待を生きのびて 13.ドメスティック・バイオレンスとどう取り組むか～親指のルールを打ち破って 14.わかちあいから生まれる「体験的知識」～セルフヘルプ理解セミナーの記録 15.相談員のための相談実践マニュアル～横浜女性フォーラムにおける男女共同参画をすすめる相談 16.ドメスティック・バイオレンスをのりこえて～朗読作品「ひまわり」を読む
『女と男のブックナビ』2007年
『YOKOHAMA わたしの防災カノート』2009年
『“ガールズ”自立支援ハンドブック』2012年(NPO法人全国女性会館協議会)

広報誌

- 『フォーラム通信』1988-2017
英文ニューズレター『YOKOHAMA WOMEN'S FORUM』vol.1-22 1993-2004

※「年」と表記したものは発行年、表記のないものは年度。
※このほか、視聴覚資料、冊子を多数制作しました。男女共同参画センター横浜情報ライブラリに所蔵しています。2008年以降の調査報告書は協会ウェブサイトに掲載・公開中。

前史 1980-1986

○は横浜市事業

1980

- 横浜市婦人の生活実態と意識調査
- 婦人スポーツトレーニング施設基本構想調査

1981

- 主婦の意識面接調査
- 横浜市女性の自主グループ活動調査

1982

- 横浜市女性の労働と生活調査
- 女性センター基礎調査

1983

- 横浜市女性の生活ネットワーク調査
- 横浜市女性の施設利用とネットワーク化調査
- センター基本構想準備委員会
- 基本構想策定

1984

- 婦人総合相談調査
- 横浜市女性の再就職調査
- 用地取得、「基本構想」、「施設構想」

1985

- 女性の情報システム作り基礎調査
- 生活情報ニーズグループインタビュー調査
- 横浜市女性の再就職雇用動向調査
- 測量調査、基本設計、実施設計
- 事業プログラム計画、管理運営計画、広報

1986

- 女性人材情報収集調査
- 横浜市女性の能力開発調査
- 工事着工
- 情報ネットワークシステム設計
- 事業計画作成、資料収集
- 総合相談システム作り、地域助け合いネットワーク作り

草創期 1987-1992

1987

- 生活自立基礎調査
- 横浜女性フォーラム健康事業企画調査
- 10月：財団法人横浜市女性協会設立**
- ＊理事長に高橋展子就任



開館記念式典

1988

- ＊横浜女性フォーラム開館（9月）
- ＊再就職準備講座 ルトラヴァイエ
- ＊起業支援講座 マイショップ・マイビジネス
- ＊ここからだと生き方の相談
- ＊情報ライブラリ
- ＊情報システム「フォーラムメディア」
- ＊自己開発プログラム
- ＊『フォーラム通信』発行
- ＊アディクションセミナー in YOKOHAMA



フォーラム通信

1989

- ＊健康サロンに女性の人体模型完成
- ＊童話『アリーテ姫の冒険』監修・刊行
- ＊“趣味から仕事へ”市民講師養成講座
- ＊職域拡大“男性職種に進出”シリーズ
- ＊市民研究グループ助成公募



『アリーテ姫の冒険』

＜横浜・日本・世界の動き＞

1945 婦人参政権

1947 日本国憲法、民法改正（家制度廃止）
教育基本法（男女教育機会均等）

1975 国際婦人年世界会議（メキシコ）

1977 国立婦人教育会館開館

1978 横浜市婦人会館移転開館

1979 国連「女子差別撤廃条約」採択

1980 「国連婦人の10年」中間年世界会議（コペンハーゲン）

1981 民法一部改正（配偶者の相続分2分の1に引き上げ）

1983 横浜市婦人行政推進室設置

1985 「国連婦人の10年」最終年世界会議（ナイロビ）

女子差別撤廃条約批准
国籍法及び戸籍法一部改正
男女雇用機会均等法、労働者派遣法
「よこはま女性計画」策定

発展期 1993-2004

1990

- *横浜女性国際セミナー「開発と女性」
- *もうひとつのスペース“Q・気遊”
- *フィットネスルームで
「きくち体操」など19コース

1991

- *理事長に有馬真喜子就任
- *ジュディ・シカゴ講演会
- *『新版 女のネットワーキング』編集・刊行

1992

- *女子学生職業計画プログラム
講座キャリアデザイン
- *骨盤底筋体操教室
- *女性のためのからだ性と性の相談
- *瀬戸内寂聴さんの寄贈本で「寂聴文庫」開設



北京会議 メディアセンター



日本国憲法と男女平等条項

1993

- *フォーラムよこはま開館(7月)
- *働く女性の異業種交流「MMクラブ21」と「水曜サロン」
- *英文ニューズレター『YOKOHAMA WOMEN'S FORUM』発行
- *『女のグループ活動資金づくりの本』刊行

1994

- *アジア女性起業家会議(UNIDO共催)
- *市民活動応援講座
- *働く女性のためのグループ相談会
- *市民研究助成を市民活動助成に拡大



MMクラブ21
パンフレット

1995

- *第4回世界女性会議(北京)に横浜市民派遣団15人と職員を派遣、
NGOフォーラムに参加
- *戦後50年対談「日本国憲法と男女平等条項」
(ベアテ・シロタ・ゴードン、土井たか子)
- *キャサリン・マッキノン講演会
- *『横浜に生きる女性たちの声の記録』シリーズ発行
- *『女性施設ジャーナル』(2003年まで毎年刊行)
- *『女性起業の完璧マニュアル』刊行
- *自助グループ支援事業公募

1996

- *10周年記念『女性問題キーワード111』刊行
- *『横浜市女性相談 ニーズ調査報告書I』発行
- *フォーラムブックシリーズの発行スタート
- *『海外女性情報』年4回制作・発行
- *ビデオ「少女への暴力～女性性器切除とは何か」
日本語字幕版制作、上映・講演会

1997

- *協会設立10周年記念式典
- *フォーラメディアのインターネットサービス始まる
- *アサーティブネス・トレーニング
- *連続講座「キーワードで読む女性問題」

1998

- *女性に対する暴力 電話相談
- *講座キャリアマネジメント
- *自助グループ応援セミナー
- *国際セミナー「夫・恋人からの暴力」

1999

- *「私のセクシュアリティー
ビル解禁／生理痛／お産」
- *女性のためのパソコン講座
- *しごとフォーラム「介護保険と福祉のしごと」



女性施設ジャーナル
vol.1



女性問題
キーワード111

1991 育児休業法

1993 世界人権会議(ウィーン)
国連「女性に対する暴力の撤廃に関する宣言」採択
パートタイム労働法
学習指導要領改訂(家庭科男女共修)

1994 国連人口・開発会議(カイロ)

1996 優生保護法を母体保護法へ改称

1997 介護保険法

1998 特定非営利活動促進法

1995 第4回世界女性会議(北京)
育児・介護休業法
阪神・淡路大震災

1999 男女共同参画社会基本法

発展期 1993-2004

2000

- ＊横浜市婦人会館の管理・運営を受託
- ＊国連特別総会「女性2000年会議」に職員派遣
- ＊自分でつかもう 結婚・離婚・家族をめぐる法律講座
- ＊からだの手当&仲間づくり～産後のヨーガ

2001

- ＊性別による差別等の相談開設
- ＊女性のための起業スクール

2002

- ＊理事長に藤井紀代子就任
- ＊女性外来連携「女性の健康セミナー」

2003

- ＊育児中のあなたに～職場復帰準備講座
- ＊女性のためのDV情報提供会
- ＊女性のための護身術～10歳からシニアまで
- ＊フォーラムブック15『相談員のための相談実践マニュアル』発行
- ＊「情報はちから」リーフレット(No.1～7)



「ひまわり」朗読チーム

2004

- ＊DV・トラウマからの自己信頼回復講座
- ＊女性のための心のアート
- ＊朗読舞台「ひまわり～DVをのりこえて」
- ＊『DVにさらされる子どもたち』日本語訳書刊行

2000 国連「女性2000年会議」(ニューヨーク)
国連ミレニアム開発目標(MDGs)設定
ストーカー規制法
児童虐待防止法

2001 配偶者暴力防止法
横浜市男女共同参画推進条例

2003 次世代育成支援対策推進法

3館の時代 2005-2017

2005

- ＊財団法人横浜市男女共同参画推進協会に名称変更
- ＊横浜市男女共同参画センター3館
(男女共同参画センター横浜・横浜南・横浜北)の第一期指定管理者となる
- ＊フォーラムよこはま閉館
- ＊男女共同参画センター横浜北開館
- ＊リンダ・ジンガロ講演「性暴力・性暴力被害の支援に関わる人のために」
- ＊乳がん手術後の健康づくり
- ＊おすすめ本フェア



おすすめ本フェア

2006

- ＊センター横浜北で市民運営協議会

2007

- ＊女性起業UPルーム開設
- ＊女性起業家たまと塾
- ＊女性の視点を生かした防災のまちづくり事業
- ＊女性のための再就職応援フェスタ
- ＊『女と男のBOOKナビ』編集・発行
- ＊市民・NPOがつくる男女共同参画事業公募



女と男のBOOKナビ

2008

- ＊『YOKOHAMAわたしの防災力ノート』発行、講師派遣
- ＊『若年女性無業者の自立支援に向けた生活状況調査報告書』発行



YOKOHAMA
わたしの防災力ノート

2009

- ＊開港150周年記念「横浜と女性」企画展
- ＊DVを経験した女性のためのサポートグループ「さらさ」
- ＊DVD教材『セクシュアル・マイノリティ理解のために
～子どもたちの学校生活とところを守る』制作(助成)
- ＊ガールズ編 しごと準備講座

2010

- ＊理事長に合田加奈子就任
- ＊心とからだと生き方の相談センター(改組)
- ＊若年無業女性の就労体験「めぐカフェ」
- ＊求人情報サイト「わたしのおしごとHAPPYナビ」

2011

- ＊公益財団法人となる
- ＊横浜市・内閣府とともに『災害時における
男女共同参画センターの役割調査報告書』発行
- ＊横浜市DV相談支援センター開設、一部機能を担う
- ＊ハラスメント研修の講師派遣

2012

- ＊横浜市共催「横浜女性ネットワーク会議」
- ＊DVを経験した母子のためのケア・プログラム「まいん」

2013

- ＊STOP!デートDV写真展
- ＊女性の就業支援プログラム修了者追跡調査

2014

- ＊理事長に川名薫就任
- ＊女性としごと応援デスク

2015

- ＊『非正規職シングル女性の社会的支援に向けたニーズ調査報告書』発行
- ＊『地域における女性のリーダーシップ開発のためのヒアリング調査報告書』発行
- ＊女性のしごと応援サイト「よこはま女シゴト」
- ＊ブックカフェ



STOP! デートDV写真展



非正規職シングル女性の社会的支援に向けた
ニーズ調査報告書

2016

- ＊Charm～女の子の身を守るアプリ制作
- ＊性的な傷つきを体験した女性のための
セルフケアグループ「そよら」
- ＊よこはま女性のリーダーシップ・プログラム



Charmアプリ

2017

- ＊協会設立30周年を迎える

※主な事業について、経年的な取り組みの開始年度に記載
※法律等は制定年に記載



横浜女性ネットワーク会議

2011 東日本大震災

2012 第56回国連婦人の地位委員会
「震災災害におけるジェンダー平等と女性のエンパワーメント」決議案採択

2015 女性活躍推進法
国連持続可能な開発目標(SDGs)設定
第3回国連防災世界会議(仙台)

2017 刑法改正(性犯罪厳罰化)

30 人からのメッセージ

①現職 ②横浜市男女共同参画推進協会との主な関わり

30周年、おめでとうございます！

30年前、どんな施設、どんなプログラムやサービスを市民の方々に提供すればいいのか、熱く議論した日々を懐かしく思い出しています。

フォーラムはすべてが画期的でした。再就職支援などのプログラム、相談の体制、生活工房やフィットネス。そもそも、素人が議論して、それを実現する施設をつくる、というプロセス自体が画期的でした。それが実現できたのは、横浜市の伝統である先進性です。ただ施設等のことだけでなく、行政と民間の協働というソフトについても横浜市は先進的で、それが協会の基盤を形づくってきたと私は思っています。

「館は人なり」と今も私は思います。「人」によって、市民に役立つ、いきいきとした場が提供され続けることを願い、期待しています。

有馬 真喜子

ありま まきこ

- ①認定NPO法人
国連ウイメン日本協会理事長
- ②第2代理事長



上野 千鶴子

うえの ちづこ

- ①社会学者
- ②元『女性施設ジャーナル』
編集委員

『女性施設ジャーナル』の日々

開設以来、横浜女性フォーラムは何をやらせても先進的だった。わけても1995年から2003年まで8号続いた『女性施設ジャーナル』は、1自治体の役割を超えて、全国の女性施設を横にネットワークし、課題と方向を示す自信と自負にあふれたものだった。その後このネットワークは全国女性会館協議会に引き継がれた。

その編集委員として、ホンネトークでキーパーソンとわたりあった対談「フェミニストカウンセリングの現場 相談者とは誰か?」(河野貴代美さんと)、「男女共同参画社会基本法のめざすもの 策定までのウラオモテ」(大沢真理さんと)は、上野千鶴子対談集『ラディカルに語れば…』(平凡社、2001年)に収録した。

その後わたしは認定NPO法人ウイメンズアクションネットワークの理事長に就任、2018年度の年次大会を男女共同参画センター横浜と共催する運びになった。こんなかたちでご縁が続いていることがうれしい。

事務局がみなとみらいのランドマークタワーにあった時代に、「MMクラブ21」の顧問をさせていただいた。

横浜の未来の方角を向いた場所で、さまざまな女性たちと話し合う機会を持ったのは、ありがたい思い出。懇親会には会社員から消防士までが参集し、縦社会からはみ出すエネルギーを、横の連帯に繋げていた。

「MMクラブ」は発展的解消を遂げて、事務局が戸塚区に移ったのは、みなとみらい線の開通とほぼ時を同じくする。これから便利になる、というときの引っ越しは、賃料の値上げが原因と聞いた。今でも少し残念に感じる。男女共同サンカクが男女共同マルになるまで、地道な活動の開花を願う。

荻野 アンナ おぎの あんな

- ①作家 ②元「MMクラブ21」顧問





桜井 陽子 さくらい ようこ

- ①特定非営利活動法人全国女性会館協議会顧問
- ②元協会理事

横浜女性フォーラム、フォーラムよこはま、アートフォーラムあざみ野の3つのセンターの立ち上げを担当させてもらって、幸せな職業人生でした(といって、まだ、この業界にいますが)。アイデア全開、ネットワーク全方位で、再就職・起業支援、NPO等との協働事業、困難な状況にある女性たちの支援、各種調査、出版事業などあれこれ行い、どれも女性センターのハシリの事業で、楽しかったです。女性の大工さんを講師にした「男性職種に挑戦!」というワークショップで、横浜女性フォーラムの芝生に小さな家を建ててしまって、総務課長から「聞いてない!」って大目玉を食らったことも、忘れがたい思い出です。

年齢は誇り

先ごろ、アメリカの女性誌『アルーア』が「私達はアンチ・エイジングという言葉に別れを告げる」と宣言しました。若さだけが女性の魅力だと思うのはもうよう、ということです。「年齢で差別されたくない」と言いながら、年齢を隠す女性が多いいます。そんなことはやめましょう、重ねてきた年月に、まずは自分が誇りを持ちましょうと、ささやかな声ながら、私は発し続けてきました。

誰かと出会い、その人に興味を持ったら、必ず年齢を尋ねます。そうすると、その人の生きてきた時代が浮かび上がります。話の糸口も掴めます。「女に年齢をきくなんて失礼よ!」と言う女性がいますが、その「失礼」の基準はなんなのでしょう。年をとっていることがわかったら、女としての価値を認めてもらえないから? かまわないじゃありませんか。若かった頃がなかったわけじゃなし。生きていれば誰だって平等に年をとるのです。

シワやシミが増えたからといって、人間としての価値まで自らおとしめる必要はありません。私は今年、古希を迎えました。人一倍、恥多き人生ではありましたが、二十歳の自分より、いまの自分のほうが好きなのです。

あとさき逆になりましたが、協会設立30周年、おめでとうございませう。30年の歩みを糧に、さらなる発展を期待しております。



矢澤 澄子 やざわ すみこ

- ①研究者
- ②横浜市女性センター基本構想委員／元協会理事

横浜市立大学に勤務していたご縁もあり、1980年代から市の女性計画、市民活動の調査、女性センターの基本構想策定や運営などにに関わり、協会の歩みを身近に感じてきました。センターの基本構想(1985)は、女性の地位向上と女性問題の解決を目指し、市民活動の拠点として設立されたフォーラムの原点を示しました。当時の新聞報道からも「脱“貸館”」に舵を切った新たな理念や、情報、相談、学習・研究、交流など7つの機能の相互的展開に期待が寄せられました。それから30年、協会は女性、市民の課題とエンパワメントに向き合い、先進的取組を進める三館の事業を充実させ各地の施設運営のモデルとなり、大きな樹に成長しました。その未来に乾杯です!



山崎 洋子 やまざき ようこ

- ①作家
- ②元協会理事



アキレス 美知子 あきれす みちこ

- ①SAPジャパン(株)
バイスプレジデント人事戦略担当
- ②横浜市政策局男女共同参画
推進担当参与

フォーラムとのご縁は2013年に協会の監事をお引き受けした
時以来になる。戸塚、南太田、あざみ野を訪問したが、印象
的だったのは、同じビジョンを持ちながらそれぞれ地域に根ざ
した独自の活動をしている点だ。今後も様々な女性が集い
学び合う拠点として、横浜市の女性支援をリードしてほしい。

麻鳥 澄江 あさとすみえ

- ①すべすべアライズ、編集者 ②ジョジョ企画

私たちジョジョ企画は女性情報を発信する小さな出版
社。日本各地で活動する女性グループをまとめた『女
たちの便利帳』を1990年に発行開始し、旧来の婦人
会館から脱皮し展開した横浜女性フォーラムを紹介で
き、わくわくしました。自立・自律する現実の女性が利用
できる場。維持する苦勞に大きな拍手と感謝です。



阿部 裕子 あべ ゆうこ

- ①特定非営利活動法人
かながわ女のスペースみずら理事
- ②元横浜市女性相談ニーズ共同調査メンバー

顕在化しにくい非正規職シングル女性を「見える
化」し、女性の貧困問題を掘り下げたことや実態に
即したガールズ講座、めぐカフェのユニークさにとて
も感心しています。GGIの低さは女性の生きにくさ
に直結。社会の鏡である相談事業を継続し、男女
平等に向けた拠点として活躍を期待します。



稲邑 恭子 いなむら きょうこ

- ①(有)フェミックス代表
- ②NPO法人スペースナナ理事

20数年前から産婦人科領域の面接
による健康相談、および協会相談ス
タッフの相談についてのスーパーバイ
ザーを担当させていただいています。
ネット上に情報はあふれ、自分自身の
立ち位置がかえってわからなくなって
しまうような今こそ、個々の痛みや悩
みに寄り添う相談の提供は貴重であ
ると思います。



今井 理恵 いまい りえ

- ①神奈川県勤労者医療生活協同組合
港町診療所 産婦人科医師/医学博士
- ②相談センタースーパーバイザー



国広 陽子 くにひろ ようこ

- ①前横浜市男女共同参画審議会会長
- ②第4回世界女性会議横浜市民派遣団

何か新しいことを始めたいと思ったとき、いつもそばにいてくださっ
たフォーラム。深澤純子さんをはじめ、いろんな方と共に女性の自
己表現やエンパワメントの講座づくりを試行錯誤した日々が甦りま
す。スペースナナが生まれたのも、あざみ野でWeフォーラムを2回
開催させていただいたのがきっかけでした。

フォーラム「女性起業家たまご塾」前期塾長で
す。起業を学ぶことで、女性が精神的・経済的
に自立する支援をしている、と感じます。ビジネ
スは、完全自己責任でトライ&エラーすること
です。今後も、横浜市男女共同参画推進協会を
通じ、事業にチャレンジする多くの女性が生ま
れることを期待しています。



上岡 実弥子 かみおか みやこ

- ①中小企業診断士/
(株)キャラウィット代表取締役
- ②「女性起業家たまご塾」塾長

1995年の北京会議の際、横浜市民派
遣団のメンバーに加えていただき、NGO
フォーラムに参加したのが協会事業との
関わりのスタートでした。事前の学習会や
活動中の情報発信、帰国後の成果報告
会を通じてたくさんのことを学びました。
この経験なしに私の後半生は考えら
れないと協会に感謝しております。



熊丸 良子 くままる よしこ
①グループウイメンズプレイス代表
②『アリテ姫の冒険』翻訳

34年前、横浜市主催の海外セミナーで訪れたロンドンで、『Clever Princess』を見つけました。帰国後すぐに翻訳しましたが、当時は「賢い女の子の話はウケない」と言われました。その後出版できた時反響は大きく「頭がよいことに引け目を感じていた私をもっと小さな頃にこの本と出会っていたら人生は変わっていたと思う」との感想がありました。それで絵本にしたいと思い、3年がかりで、皆でアプリケで彩色した1m×1.5mの大型布絵本を作り、全国を読み聞かせて廻りました。「賢い女の子」の童話を日本でもどうぞ皆様、たくさんたくさん書いて下さいませ。

在職中の最大の事件は東日本大震災で、夜間閉館という厳しい状況下、“女性と防災”という新たなテーマに挑み、成果をあげました。横浜女性ネットワーク会議の立ち上げも重要な展開でした。私個人としては2010年7月から退職まで、毎週、職員向けメールを書き続けたことがいい思い出になっています。

合田 加奈子 ごうだ かなこ
②第4代理事長



2010年に女性のための起業セミナーカフェ編で講師を務めさせていただいた際には、大勢の熱意あふれる受講生の方々の姿に感銘を受けました。また、フォーラム南太田でのめぐカフェ立ち上げや、市民運営協議会委員などを通して、男女共同参画に関わる皆様との関わりの機会をいただき感謝しております。

齋藤 保 さいとう たもつ
①(株)イータウン代表取締役 ②コミュニティビジネス支援



地元紙の神奈川新聞にとって協会は身近な存在です。スタッフによる渾身の連載「女と男のブックナビ」は協会20周年のとき1冊の本になりました。また、「♀(女)の本音」というタイトルの本紙コラムに参加してもらったこともありました。時代は新たなうねりの中にあります。さて次世代の連載は何でしょう？楽しみにしています。

篠原 慎一郎 しのはらしんいちろう
①(株)神奈川新聞社専務取締役 ②協会評議員



嶋田 昌子 しまだ まさこ
①特定非営利活動法人横浜シティガイド協会理事
②女性史研究家

地元本牧で仲間と始めたカンガルー文庫がきっかけとなり、生涯学級へと活動の輪が広がった。メンバーに男性の姿がちらほら見えたと頃、横浜女性フォーラムがオープンした。運営委員としてかかわる一方、篠田登美江先生を中心に「よこはま女性史研究会」を発足させた。その成果が『よこはまを生きる女たち』の刊行に結び付いた。発行は横浜市婦人会館、いまのフォーラム南太田の前身だ。



高村 典子 たかむら のりこ
①事務員兼金曜日の「はる美」ママ
②元「MMクラブ21」メンバー

横浜へ引っ越して自宅と会社の往復の日々。地元の友だちが欲しくて参加した「MMクラブ21」。働く女性の異業種交流会は、刺激的で楽しくてどんどん輪が広がりました。人生の転機とともに。世の中は変わっても、「MMクラブ」でのつながりは永遠です。大きな声で叫びたい、「ありがとう!!」



椿 直樹 つばき なおき

- ①(株)よこはまグリーンピース
代表取締役
- ②横浜野菜推進委員会、料理人

私が地産地消の活動を開始した18年前から現在に至るまで、ターニングポイントになる場所を提供して下さいました。それぞれの担当者とは今でも良いお付き合いをさせていただいており、私にとってはなくてはならない協会です。これからも末長くよろしくお願いいたします。

2003年から2か年、「女性のための護身術」を市民企画講座としてサポートしていただいたところから、私の人生が新たに始まりました。さらに、「障害のある子どもへの性の健康教育」でもサポートいただき、横浜市内の小・中学校へ出前講座を実施できました。

様々な活動は今も続いています。チャンスは人を育てますね。



橋本 明子 はしもと あきこ

- ①リアライズYOKOHAMA代表
- ②女性のための護身術Wen-Do講師

再就職準備講座ルトラヴァイエを受講したのは25年前。その後これまでにいいことばかりじゃなかったけれど、今の自分に「まあまあじゃん」と思える日々を過ごせているのは、この講座と「修了者の会」のおかげです。フォーラムに出会えてよかった。ありがとう！そして、これからもよろしくお願いします。

服部 典子 はっとり のりこ

- ①会社員
- ②元ルトラヴァイエ修了者の会世話人



女性の健康講座のテーマおよび講師の選定を担当しました。私自身も乳癌のお話をさせていただきました。講座がきっかけとなり、リンパ浮腫や骨盤底筋の体操教室が始まり、私も医療従事者のDV対策を担当するなど、その後の発展の原点に立ち会わせていただけたことは幸運だったと思います。

土井 卓子 どい たかこ

- ①湘南記念病院乳がんセンター長、外科医師
- ②講座監修



都市型女性センターとして常に課題を先取りし、挑戦して30年。40周年に向けて、いっそうのご発展をお祈りします。多様な年齢、人種の女性をエンパワーするだけでなく、すべての横浜市民のジェンダー理解が進むプログラムを開発・提供し、ジェンダー平等度世界ナンバーワンの都市作りを！

橋本 ヒロ子 はしもと ひろこ

- ①国連女性の地位委員会(CSW)日本代表／
十文字中学・高等学校校長
- ②元国立女性教育会館
情報交流課長



藤井 紀代子

ふじい きよこ

- ①特定非営利活動法人
日本ILO協議会監事
- ②第3代理事長

女性フォーラムの開館式典に、総理府婦人問題担当室長として出席しました。全国に先駆けての先進的で考え抜かれたポリシーに基づく施設と感銘を受けました。その後理事長を務めさせていただき、協会の名称変更、三館体制、指定管理者制度などありましたが、市民の積極的参画とスタッフの情熱で素晴らしい発展をみたことをうれしく思います。

在宅ワークの実態を調査したいと戸を叩いたのが1995年。2012年にはフォローアップ調査も市民協働事業でさせていただきました。フォーラム職員の方々は、働きながら子育てもする仲間と感じられました。今、ガールズ講座修了生の職業体験受入れを通じて娘世代と一緒に応援できて幸せです。頼もしい同志、応援しています！



堀越 久代 ほりこし ひさよ

- ①(株)ティーアールアイ
- ②在宅ワーク研究会代表

フォーラム開館の年に第1回「アディクションフォーラムin横浜」を開催しました。アルコール等依存症者の自助グループ(AA等)とその回復は、まだ社会に理解されにくい時代でした。フォーラムは理解し、後援して下さいました。そして、毎年開催され今に至っています。フォーラムの先駆性に感謝！



村田 由夫

むらた よしお

- ①(一社)横浜市長立保育園
園長会相談役
- ②元アディクションセミナー
in Yokohama実行委員長

約20年前、子育て中の母たちによる草の根提言「よこはま一万人子育て提言プロジェクト」では、ランドマークタワーのオフィスを借りて、集まった声の掲示とフォーラムを開催しました。日米女性リーダー交流プロジェクトで学びの機会をもらったことも懐かしいです。折々の支援に育ててもらい、感謝しています。



米田 佐知子 よねだ さちこ

- ①子どもの未来サポートオフィス代表
- ②元よこはま一万人子育て提言
実行委員会世話人



宮坂 洋子

みやさか ようこ

- ①元横浜市民局
婦人行政推進室長
- ②元協合理事

1983年秋、当時の細郷市長に横浜のまちづくりのため女性センター建設と運営する女性協会の設立許可を得てから30年余り。今、実績を積み上げてきた協会が、更に将来を見据えて社会の新しい課題に取り組み、調査・研究・実践し、地道な活動を通して羽ばたくよう日々、心より願っている。

DV被害を受けた女性のグループインタビュー調査を3都市で実施しました。新機軸を試みた横浜市の面接調査で、性的暴力の被害経験や、母親から子どもへの対応を聞くのはタブーだった頃、やってみよう相談スタッフの皆さんと挑戦しました。企画と実施、報告書作成と共にした苦労は素晴らしい経験でした。

ゆのまえ 知子

ゆのまえ ともこ

- ①元中央大、立教大など非常勤講師
(女性に対する暴力)
- ②元シェルター・DV問題
調査研究会議メンバー



「久々に自分の時間がもてました」など、保育を利用して講座を受けたママの声や、親子イベントで協力的なパパの姿、そして何よりも子どもたちの笑顔に支えられてきました。30年間、庭で子どもの部屋を見守っている滑り台“ピンクのゾウさん”とともに、協会と人々の歩みを応援していきたいと思います。

若井 光子 わかい みつこ

- ①特定非営利活動法人
Yokohamaこども応援団代表理事
- ②フォーラム子どもの部屋運営



横浜市男女共同参画センター

(公財)横浜市男女共同参画推進協会は、指定管理者として、2005年から横浜市男女共同参画センター3館の管理運営を担っています。設立当初からの特徴である情報・相談・学習の総合機能を活かし、3館で連携しながら、男女共同参画社会の実現に向けた事業を展開しています。



男女共同参画センター横浜
〔フォーラム〕

〒244-0816 横浜市戸塚区上倉田町435-1
TEL:045-862-5050

※1988年、横浜女性フォーラムとして開館。
約6,000平米。



男女共同参画センター横浜南
〔フォーラム南太田〕

〒232-0006 横浜市南区南太田1-7-20
TEL:045-714-5911

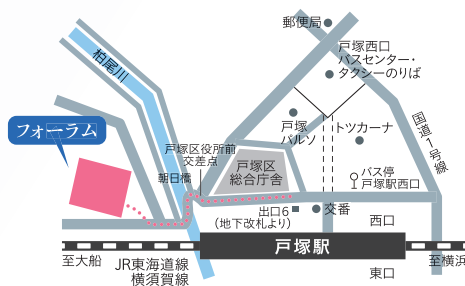
※1978年、横浜市婦人会館として(移転)開館。
約3,000平米。



男女共同参画センター横浜北
〔アートフォーラムあざみ野〕

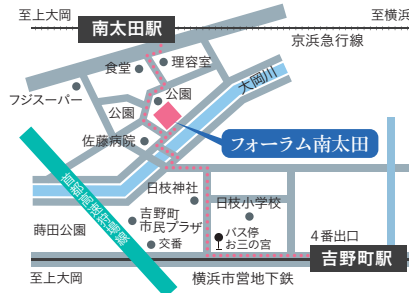
〒225-0012 横浜市青葉区あざみ野南1-17-3
TEL:045-910-5700

※2005年開館。横浜市民ギャラリーあざみ野との複合施設。約8,000平米。



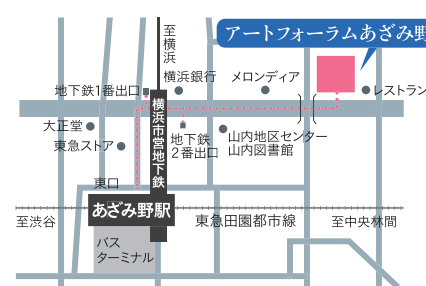
〔交通〕

JR・横浜市営地下鉄「戸塚駅」徒歩5分



〔交通〕

京浜急行線「南太田駅」徒歩3分
横浜市営地下鉄「吉野町駅」徒歩7分



〔交通〕

横浜市営地下鉄「あざみ野駅」1番出口徒歩5分
東急田園都市線「あざみ野駅」東口徒歩5分

2017



パープルライトアップ ひかりの実

あとがき

記録は財産！協会の歴史をひもとく作業の中で、改めて感じたことです。年月と人力をかけ、基礎がつくられ、太い骨組みが打ち立てられ、その上に私たちの今があります。

本誌編集にあたりお力添えいただいたお一人おひとりに、心より感謝申し上げます。そして、この冊子を形にするにあたり、特定非営利活動法人森ノオトの皆さまには粘り強く伴走していただきました。ありがとうございました。

みんなの力をつなげて、未来へのタネを育てていければ、本望です。これからも、ともに。

Special thanks

設立30周年記念事業に
ご協賛いただいた皆さま

西田装美株式会社

公益財団法人帆船日本丸記念財団

宮口 郁子

株式会社明光社

横浜ウォーター株式会社

公益財団法人横浜企業経営支援財団

横浜高速鉄道株式会社

横浜港埠頭株式会社

株式会社横浜国際平和会議場（パシフィコ横浜）

株式会社横浜シーサイドライン

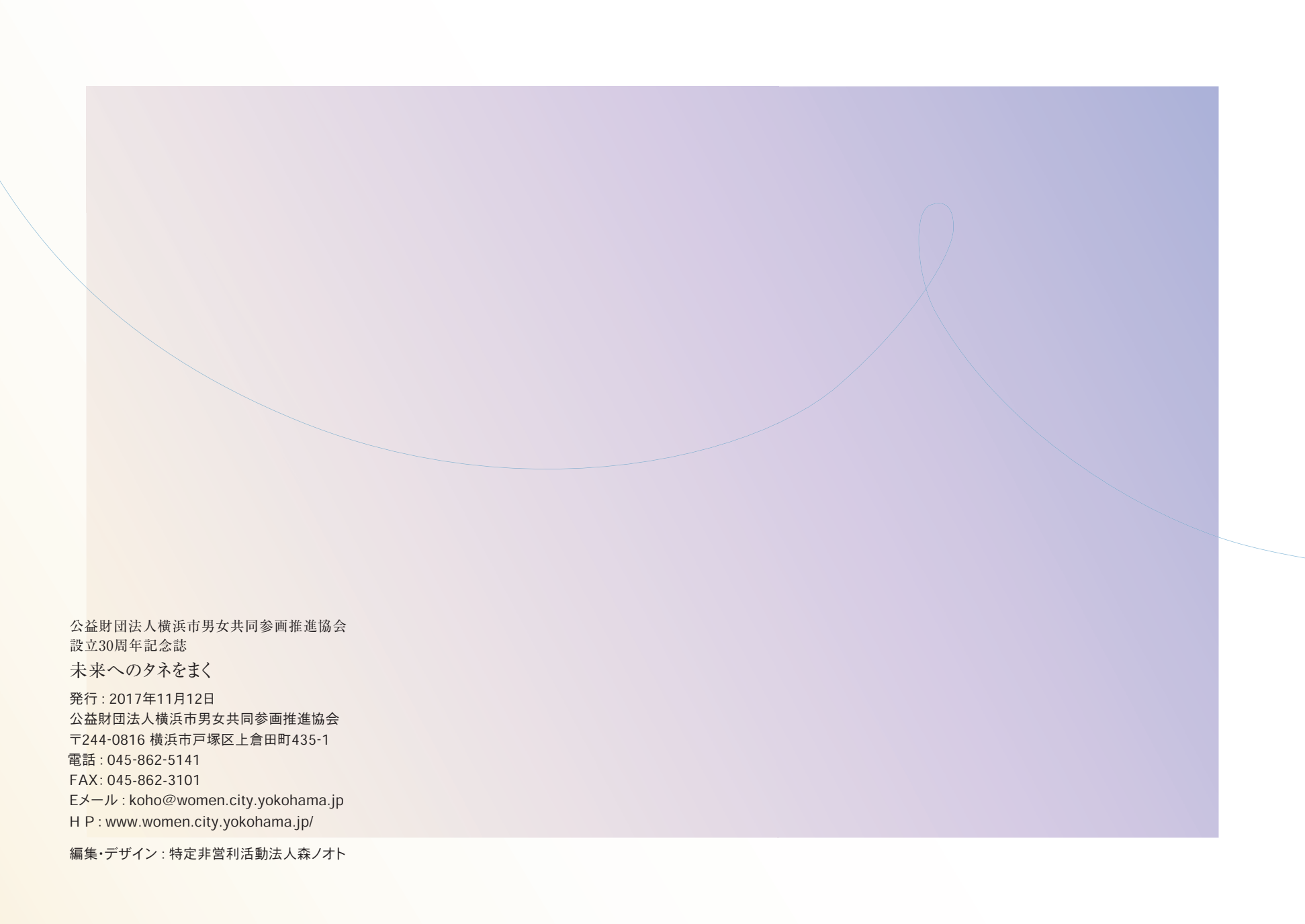
横浜市住宅供給公社

横浜市信用保証協会

公益財団法人横浜市緑の協会

横浜建物管理協同組合

（敬称略、50音順）



公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会
設立30周年記念誌

未来へのタネをまく

発行：2017年11月12日

公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会
〒244-0816 横浜市戸塚区上倉田町435-1

電話：045-862-5141

FAX: 045-862-3101

Eメール：koho@women.city.yokohama.jp

H P：www.women.city.yokohama.jp/

編集・デザイン：特定非営利活動法人森ノオト